

老舎の初期作品世界と『駱駝祥子』

渡 辺 武 秀*

On Lao shê (老舎)'s Early works and “Lo T'ò Hsiang Tsu (駱駝祥子)”

Takehide WATANABE

概要

《駱駝祥子》是老舎の代表作、真実に描写了人力車夫祥子の悲劇命運。主人公祥子是从农村到北京谋生的性格憨厚的年轻人。他决定靠拉车过日子。从身体条件来说，他个子高、身体壮、拉车最合适。况且，他也喜欢拉车。谁都认为他一定能够成功。然而，他失败了，成了一个乞丐般的人，虽然他做出了坚持不懈的努力。这是为什么呢？读者和研究者最关心的就是这个“为什么”。关于这个“为什么”已经有很多种说法，在本文中，我提出了自己的一些观点和看法。

Keywords: Laoshê rickshaw Xiangzi tragedy

はじめに

半月刊雑誌「宇宙風」の第25期(1936.9)から第48期(1937.10)まで24回にわたって発表された『駱駝祥子』^(註1)は老舎の作品の中でも最高傑作といわれている^(註2)。確かに老舎の執筆活動全般を眺めてみると、老舎はこの作品を書いた頃が作家として最も脂の乗りきった時期といえる。そしてこの時期の最大の成果が、まさしく『駱駝祥子』である。したがって、この『駱駝祥子』を取り上げ、老舎がこの作品でどのような創作上の試みを行い、それによって何を主張しているのか明らかにすることは、すなわち、この時期の老舎の主要な文学的成果を明らかにすることになる。これは、彼の文学の軌跡をたどる上でも、彼の文学を理解するためにも極めて重要であると考えられる。

方法としては次のように考えている。これまで筆者は初期の長篇小説について考えてきたのだが^(註3)、この考察で老舎の創作の方法や作品の

本質のようなものをいくらか知ることができたように思う。そこで、まず、これまでの老舎の初期作品世界考察の成果を整理し、それを手がかりにしながら『駱駝祥子』を分析していこうと思う。こうすることで、従来の『駱駝祥子』の見方とは、いささか違ったものがでてくるのではないか。またさらにはこの考察を通じて、この小説が国の違いや時代を超えて読者を引きつけるのか等も明らかにできればと考える。

一、老舎の初期作品世界

初期作品というと『老張的哲学』(1926)『趙子曰』(1927)『二馬』(1929)という作品が挙げられよう。まず、これらのそれぞれの作品について考えた結果を簡単に整理し、老舎の作品の傾向を押さえ、それを手がかりに『駱駝祥子』を考えることにしたい^(註4)。

これらの初期作品は「ユーモア作品」と呼ばれることがある^(註5)。確かに1926年に長篇小説『老張的哲学』で文壇に登場して以来しばしば彼は自分の作品に「笑い」を持ち込み、読者を笑

平成8年10月18日受理

* 総合教育センター・助教

わせていたのである。この点で初期の作品は「ユーモア作品」と呼ばれてもおかしくないものがあった。そこで筆者は、この「笑い」があるという事実に注目し、その「笑い」が文脈の中でどのような意味を持ち、どのような効果を上げているかを考えた。こうすることで、結果的には、いくらか老舎の独特の世界が見えてきたような気がする。

例えば『老張の哲学』の趙おばさんと『趙子曰』の趙子曰の描き方に注目すると、趙子曰も趙おばさんも「とても良い人」で、みんなから好かれ、愛されている。この印象が「笑い」によって表現されていることがわかる。ところが、この「とても良い人」であるはずの趙おばさんや趙子曰が、驚いたことに他の人、特にその中でも「自分の愛する人」を不幸にしている事実が、これもまた「笑い」をともないながら描き出されている。このような事実を初期の作品全般を念頭に置きながらまとめれば以下のようになる。

最初に、この、ある人Aが他の人Bを不幸にする関係を図示しておけば、以下のようになる。

(圧迫)

A (良い人) → B (良い人)

この2人の関係で、Aが極悪非道な人物で、善人のBをかわいそうな目に遭わせていると描かれれば、むしろすっきりする。このようであれば、Aをやっつければまるくおさまるということになろう。ところが、老舎の初期作品を細かく見ると、そうではなく、作品の中では加害者であるはずのAは「良い」人物として描かれているのである。そして、その二人の間に、AはBを苦しめ、不幸な状態に追い込んでいくといった関係が生じてしまっている。この際に、加害者であるはずのAもBに対し悪い感情を持っているわけではない、それどころか、AはBを不幸にしているという意識さえもない。無意識なのである。いや寧ろBによかれと思って

やっている。この状態の中で、結果的に、Bを極めて不幸な状態に落とし込んでしまうのである。このような場合でも、被害者のBのほうでもAを悪い人物とは考えていないばかりか、むしろ好きであったりする。

このようなケースの最も分かりやすい例が、『老張の哲学』の趙おばさんの例である。不幸な関係は趙おばさんの姪と趙おばさんとの間に生じたものである。姪の名前を李静という。李静には母親がいなく、趙おばさんは彼女を自分の娘のようにかわいがっていた。母親代わりである。この二人の間に不幸な関係が生じたのは、李静に結婚話が持ち上がったことにある。趙おばさんの時代には自分たちの意志で結婚するなどということは考えられないことであった。むしろ親たちの決めた相手と結婚するのが普通だった。だから、趙おばさんは、この考えを踏まえて李静の結婚を進めようとした。だが、李静には好きな人がいたのである。しかし趙おばさんはそれを認めることはできない。だから、趙おばさんが自分の考えに基づいて行動すれば、その李静を苦しめることになってしまうことになる。しかも李静は趙おばさんが良い人だと知っているが故によけい悩むのである。一方、趙おばさんの方は、なぜ李静がふさぎ込んでいるのかわからない。そこで、心配して李静に栄養のあるものを買ってきて食べさせようとするような行動を取る。

お互いに対する憎しみはない。ただ趙おばさんの「愛情」がゆがめられて李静に向かっていく。その結果、李静からすれば趙おばさんの「愛情」がそのまま「愛情」にはなっていないのである。趙おばさんはこのことに気づくことはない。これは実に不幸な事実である。

では、なぜこのような不幸なことが起きたのか。それは趙おばさんの頭の中に、結婚に対する古い考えがしっかりと、疑う余地のないものとして入っているからであるといえるだろう。まさに趙おばさんという人物の頭に、この考えがあるという、この一点のために趙おばさ

んは李静を不幸に追い込むのである。

つまり、老舎が描く A が B を不幸にするという本当の形は、じつは A の頭の中に「ある考え」があって、なにかの事件が生じたときに、A がその考えによって行動することによって B を不幸にしてしまうというものである。これがまさしく初期作品の、不幸が出現する、その真のシステムである。それを図示すれば、以下のようになろう。

(圧迫)

ある考え⇒A → B⇒不幸になる

これらが初期作品におおむね共通して出てくることになる。

「ある考え」は、時には、その社会に流布している伝統的な結婚に対する考えであったり、人種偏見であったりする。

このように整理すると、老舎という作家が初期作品で何を、どのように表現しようとしているのか、いささか明確になってくるのではないかな。老舎が描き出す、この皮肉な悲劇の構図は、たとえ A という存在がなくなったとしても、B を不幸にしている根本のものがなくなるといことが示されていることになる。A が B を不幸にするような関係は、そのおおもとに、実は A をそのようなふうに行っている「ある考え」のようなものが頭の中にあるからで、これがなくなると限り A が B を不幸にするという関係はそのまま残ってしまう。残っていれば、やがてまた新たな A が出現し、また新たな B を不幸にすることになる。そうして、人を変え、時代を変えて、不幸が発生するシステムは残り続けるのである。『老張的哲学』『趙子曰』では「ある考え」の存在を暴き出すというより、このシステムが存在するという事実を指摘する事に重きが置かれているように思う。特に後者では、それが強いような気がする。

では、この不幸を生み出すシステムを破壊するためにはどうすればよいか。図式的に考えれ

ば、そのためには A の頭の中にある「ある考え」を消滅させなければならないことになる。では「ある考え」を消滅させるためにはどうすればよいか。英国のロンドンを舞台にし、中国人というだけで差別されるといった「人種偏見」を取り扱った『二馬』になると、このようなものも描き出されているような気がする。この作品の「人種偏見」というテーマでいえば、違った人種の人が実際に日常的なレベルで交流し、そのことを通して互いを認識する以外には方法がないことが描き出されている。だが、やはり、いったん出来上がり、それが既成事実になってしまうと、それを消滅させるのは容易でないことも、同時にこの作品に表現されているのである。

また、この不幸を生み出すシステムには、人間の弱点が関与している事実の指摘になっていることにも注意したい。人間はおそらく誰でも自分の行為は、ちゃんとした「自分の考え」に基づいて行動していると考えている。しかし、その「自分の考え」と思っているものの、果たしてどれだけが本当に「自分の考え」なのか。もしかしたら「自分の考え」と思っていたものは、実は、マスコミや周りの人から与えられたものではないのか。人間はマスコミや周りの人から得た考え方を自分の考えと思ひ込み、操り人形のように行動してしまい、その結果他人を不幸にしてしまうことがあるのではないかな。これも、人間の弱点の一つではないかな。

以上のことから、老舎は初期の作品に、人間の感情のうち、貴重と思われているもの、たとえば「善意」「愛情」とかいうものの伝達をゆがめてしまう何物か、自分ではそのつもりではないのに、結果的にはそのつもりではないものになってしまう局面、そしてこのことから起こってしまう「不幸」を描き出しているといえる。

つまり、老舎は、もともとごくありふれた日常生活の中に起こっている不幸を感じ取り、彼独特の表現形式で、その不幸がどのように生み出され、どうして容易になくならないかといった仕組みを、人間の弱点を通して描き出すこと

に優れた作家であるといえるのではないか。

そして、この延長線上に老舎の『駱駝祥子』はあることになる。

以下、このような点を手がかりに、節を改めて『駱駝祥子』を考えてみる。

二、 『駱駝祥子』の構造

『駱駝祥子』の主人公は祥子という人物である^(註6)。祥子は親兄弟もなく、田舎から北京に出てきた若い青年である。彼は人力車夫をして生活することにする。「車を引く」というのは、極めて過酷な労働だが、祥子は体も大きく、力も強い。しかも若く健康である。このことから考えると、祥子は「車を引く」という自分の体力を使って収入を得ることに最も適した人物といえる。

冒頭で作者は祥子の「車を引く」才能を以下のように表現している。

彼は足が長く歩幅が大きく、腰は非常に安定しており、走り出してもほとんど物音がしない。一步一步がみな伸縮しており、車の梶棒は動かず、お客に安全、心地よさを感じさせる。停まってくれといわれたら、どんなに速く走っていても、足が地面を二三度こすると、すぐ停まった。彼の力が車のそれぞれの部分に伝わっているかのようにであった。背中をわずかに曲げ、ふたつの手で軽く梶棒を抱え込み、彼の動きは活動的で、スキットして、正確だった。速くは見えないけれどスピードは速く、スピードはあるが安全だった。たとえお抱え車夫の中であっても、こんな素晴らしい走りをするものはなかなかいなかった。^(註7)

祥子自身も「車を引く」ことが嫌いではなく、寧ろ好きなのである。「車引き」は彼の天職だといってもよい。この「車引き」で身を立てていこうと考える。

車を引き報酬を得る。その報酬の中から車の借り賃、食事代を引いて幾らかお金が残る。そ

うのお金を貯めていけば、やがて自分の車を買えるはずである。さらに食事代を切りつめれば、お金の貯まる速度はもっと速い。そして自分の車を持つことが出来さえすれば、車を引いた分はそのまま自分の収入となり、また誰にも拘束されることなく自由に生きてゆける。祥子はこの考えに基づき、実際に「車を引き」始める。

そして、作品のストーリーは次のように展開していく。

祥子は精一杯努力して三年死ぬような思いをして、やっとのことで自分の車を買った。しかし、この車は兵隊に取られ、自分も連れて行かれていかれてしまった。しかし、兵隊が戦っている隙に、駱駝を連れ、どうにかこうにか脱出し、途中その駱駝を売って、やっとのことで北京に帰ってくる。そして、また車引きをし、自分の車を買うために努力する。

このような展開は、例えば座標の縦軸のプラスの頂点に「成功」「幸福」を設定し、プラス方向に向かう気分を「やる気」「希望」とし、マイナスの頂点に「失敗」「不幸」を置き、マイナス方向に向かう気分を「投げやり」「失望」とし、さらに横軸に時間の流れを設定するならば、彼の人生は波長のような形で表すことができよう。祥子が、ある時、彼にとって極めて不運な、ある事件に遭遇し、車を買うという希望が無惨に打ち砕かれる。彼は失望し、精神的にも立ち直れず落ち込む。だが、そのうち、また、ある幸運なきっかけで気を取り直し、車を引き、車を買うという目標に向かって努力し始める。このパターンが繰り返されている。祥子が「成功」に向かって努力し「幸福」に向かうと読者は安心し喜び、祥子の「希望」が打ち砕かれ「不幸」に向かうと読者は心配し悲しむことになる。

そうして、やがて祥子の境遇はしだいに悲慘な状況へと傾いて行くことになる。

身長も高く、身体も頑丈で、しかも車を引くのが好きということから考えれば、どこから考えても車引きとして成功しないはずがない。成功するためのすべての条件が揃っていたにもか

かわらず、うまくいかなかったのである。それ故、なぜこうなったのか、この点は、読者、研究者の最も関心の引くところであり従来いろいろ述べられてきている。^(註8)

まず、考えられる理由の一つは、祥子を取り巻く社会環境である。

祥子の悲劇は「少しも彼自身の誤りではない」、旧社会制度の、残酷な絶えざる迫害、腐食の結果である。祥子が北京にやってきたとき、未荘の阿Qよりずっと素朴だった。だが、半植民地の消費都市には、とても大きな腐食力があり、そのことが多くの破産した農民を現代工業無産者のグループに入れて行けなくした。祥子はこのような環境の下で、一人のまじめな農民から正真正銘のごろつき無産者になってしまった。^(註9)

もう一つは祥子の、自分の運命とのまづい戦いを指摘することもある。

作品は旧社会を告発し、祥子に対する深い哀惜を表すと同時に、祥子が個人の奮闘によって自分を解放しようとした誤った道を批判している。一人のまだ目覚めてない個人労働者である、祥子は若い体力と必死の働きによって自分も運命を変えようとした。だが、彼は孤立無援で、何度かの打撃の下、彼の精神的支柱は全面的に崩壊してしまった。小説の末尾に、作者は指摘する、この「墮落して、利己的で、不幸な、祥子は『個人主義のなれの果て』」と。^(註10)

さらには祥子の「視野の狭さ」「無知」、さらには「車狂い」、余りにも車に執着しすぎたという見方もある。^(註11)

或いは、さらに作品から、その社会における「車引き」に対する不合理な扱いも考えられる。汗水を流し一生懸命に仕事をし、真面目に生活しているにもかかわらず、それが評価されないばかりか、却って「車引き」という理由で、或いは貧しくお金がないということで人間らしく

扱ってもらえない。そればかりか、さらには酷い目にさえ遭わせられることがある。

その他、戦争、或いは過酷な自然環境といったものも、祥子を不幸に追いやるものと考えることができる。

或いは、「人間である」ことの宿命から来るものもあるだろう。例えば、「人間である」から病気にもなる。種々の誘惑に負けたりもする。ともあれ、「車引き」というのは肉体労働であるから、病気をしたり、歳をとったりして肉体が衰えるとともに「車引き」の仕事が辛くなることははっきりしている。これは人間が機械でない以上、必然的に起こるものである。

もちろん、これらのものは、それぞれが別個にあるものではなく、それぞれが互いに影響し合っているものでもある。例えば、肉体の衰えなどは、その社会の差別的扱いによってさらに加速されることは十分考えられることである。

「車引き」を不幸に落とす原因として挙げられるものは、これで十分であろう。ただ、筆者は初期作品分析の経験から、この作品の中でも老舎の独特の作品展開が存在しており、作品の中の、特に、

- 1) 前述した中から、特に社会に流布し、社会の通念のようになり、その当時の人々の頭の中にしっかり定着している「車引き」に対する見方・考え方、それからもたらされる彼らに対する差別待遇、
- 2) また、むしろ長所と考えられる祥子の好ましい性格、^(註12)

に注目して、祥子が不幸に落ちていく形を見てみたい。

そして、この方向から祥子が「不幸」に陥る、その陥り方を考えることによって作者の、この作品でやろうとした試み、作者の主張のようなものが、いくらか理解できるのではないか。

まず、祥子の性格であるが、いくらか口下手で自分の感情をあまり人に言えないという欠点はある。だが、無口という性格さえも、全く欠点といえるものではなく、ある時には好ましい

ものといえるだろう。ともあれ、祥子は「真面目」で、「正直」で、「大人しく」、性格的にはほとんど完璧に近い好ましい人物として作品に登場する。

実際に、この、祥子が「真面目」であり、「正直」であり、「大人しい」ことを窺える文章を提示するのは難しくない。以下の文章は、「四」回の、「車引き」を始めて少しばかり時間が経った頃のエピソードだが、祥子の真面目さ振りを伺い知ることができる。

車宿では、彼はいつも動いていた。汗を落とし終わったらすぐ仕事を見つけてした。車を磨き、空気を入れ、幌を乾かし、油を差し、……誰かが指図をする必要はなかった。自分でやりたがった。喜んで仕事をした。それがまるで一種の娯楽でもあるかのようだった。車宿にはふだんいつも二〇数人の車夫が泊まっていた。車をしまうと、みんな坐ってよもやま話をするか、布団をひっか被り、ぐっすり寝ていた。祥子、ただ祥子の手だけがいつも動いていた。初めは、みんなは彼が劉四爺にこびへつらっている、おべっか使いのやつだと思っていた。だが、何日か経つと、彼らは祥子が少しも機嫌取りの気持ちがないことが分かってきた。彼がとても真面目で、自然で、何にも言うことはなかったのだ。劉旦那は一言も彼を褒めず、特に彼に眼をかけるということもなかった。心の中ではわかっていた。彼は祥子が腕利きであることを知っており、たとえ自分の車を引かなくとも、祥子が車宿にいることを願っていた。祥子がここにいれば、まず何はなくとも、中庭と入り口はいつもきれいに掃かれているからである。^(註13)

この真面目さは、他人から嫌がられることのない真面目さなのである。正直さも、それに近い。しかも寡黙である。祥子の性格に、人に嫌がられたりするものはほぼ何もない。作品の効果という点からすれば、この「正直」で、「真面目」で、「大人しい」人物の描き方によって、読者の方は祥子に好意を寄せ、祥子の将来に関心

を持ち始め、彼が窮地に陥れば、心配をもすることになる。作品の冒頭で作り上げられた、この、あくまで「善人」である印象が、作品全体の背後を貫いている。これが、読者を作品から最後まで離さない要因の一つにもなっていると考えられる。

だが、この人間としては素晴らしいはずの彼の性格は、作品の展開という点から見ると、祥子が不幸へと転落して行く際に、決定的な形で不幸に関わっているように見える。そして、そうであるからこそ、なおいっそう、この物語の悲劇性が高まっているのではないか。

もし祥子がほとんど人に嫌われることがない、むしろ人に好かれ、信用される性格だからこそ却って不幸になるのであれば、これをどう考えればいいのか。このような点を「節」を改めて述べていく。

三、『駱駝祥子』の悲劇

作品は波形のように展開して行くのであるから、いろんな事件が起こる。ここでは、まず、種々の事件の中でも、自分の車を買おうと、長いことかかって、血の出るような思いをして貯めたお金を、孫刑事に奪われる事件を取り上げる。この事件は祥子の人生にとってはきわめて重要な出来事となる。

I 《孫刑事にお金を奪われる事件》

ある夜、曹先生が友達と映画を見に行くため、曹先生のお抱え車夫をしている祥子は車を引いていくことになる。その帰りに曹先生が乗った車を尾行するかのようになり、自転車が一台、着かず離れずついてきた。この自転車の尾行に身の危険を感じた曹先生は、祥子に曹先生の友人の左という人の家に行くように指示する。その人物の家ならば、誰も、たとえ刑事でも手出しができないからである。そして、左邸に着いた曹先生は自分の妻や子供を連れてくるようにというものを含めたいくつかの用事を祥子に託す。

① 「車引き」に対する差別

祥子が曹先生の家に着くと、一人の刑事が待っていた。これが孫刑事である。この孫刑事と祥子は顔見知りであった。以前祥子が軍隊に連れて行かれたとき、孫刑事が祥子の直接の上司であったのだ。その彼が祥子の貯めていた金を脅し取ろうとするのである。彼の言い分は以下のようなものである。

「わしにかまう暇があったら、どうして曹先生をかまわないんだ？」祥子は長いこと、うめいてやっと言った。

「あいつは正犯だ、捕まえたら、なにがしかの褒美がもらえるが、取り逃がしたら責任をとらされる。おまえは、おまえはな、逃がしたって尻をぶっ放すようなもんだし、殺したって南京虫をひねり潰すようなものだ。金を出せば、すきにしな。出さなきゃ、そう、天橋の処刑場で会おう！ぐずぐずするんじゃねえ、はっきりしろ、子供じゃねーんだから！いいか、この金だって俺が独り占めするわけにはできねえ、仲間みんなが分け前にあずかることになるんだ。たいした額にはならねえ。命がこんなに安く買えるのに買わないっていうんなら、俺にはどうしようもねえよ！おまえ幾ら持つてるんだ？」^(#14)

この事件は、曹先生が学生の密告され、刑事が曹先生を尾行していたもので、もともと祥子には何の関係もないものであった。だから、すぐには孫刑事が祥子から何を根拠に金を脅かし取ろうとしているのかがはっきりしない。だが、よくよく考えると、孫刑事の論拠はそもそも祥子が悪いことをしたとか、しなかったなどに関係ないところにあることがはっきりしてくる。つまり孫刑事は、祥子が社会では一人の人間として扱われてない「車引き」だからということ根拠に脅しているのである。孫刑事は『阿Q正伝』の役人が阿Qをそうしたように、たとえ冤罪であったとしても「車引き」のような身分のものを殺してもよい権利を持っている。だか

ら祥子は「車引き」だから、逃がそうが、殺そうが、あるいは間違いであろうがそんなこと一切問われることはない。殺してしまっても間違いでしたといえれば許されるのである。だから金を出せば助けてやるし、出さなければ捕まえ、刑場に送るというわけである。

だが、曹先生を金と引き替えに逃がすことはできないとする。なぜなら曹先生は重要人物であるからだという。しかし、祥子には納得行かない。何も悪いことはしてないのだ。

「わしが誰に悪いことをしたんだ？！」涙声混じりで言い、またベッドの端に坐った。

「おまえは誰にも悪いことをしちゃにいねえ。貧乏くじを引いただけだ！人は生まれつき金持ちでなけりゃいけねえ、俺たちやお互いに同じような境遇だ。何も言うんじゃねえ！」孫刑事頭を振り、無限の感慨に耽っているようだった。^(#15)

この孫刑事の発言で注目したいのは、孫刑事もまた貧乏であり、むしろ車引きの境遇に近いと発言している点である。この種の発言は、無慈悲かつ極悪非道な孫刑事の「悪人」としてのイメージをやわらげるものと考えて良いのではないか。もちろん初期作品のように孫刑事を積極的に「善良」なイメージ醸し出す表現は取られてはいないが、孫刑事が祥子を不幸に落とす関係について、すでに初期作品の考察結果で述べたようなことがここでも言えるのではないか。

さしあたり、孫刑事が祥子を不幸にする関係を図で表すと以下ようになる。

(不合理な仕打ち)

社会通念⇒孫刑事——→祥子⇒不幸になる

もちろん祥子の血のにじむような努力の結果蓄えたお金を奪う孫刑事を「良い人」とすることはできないが、作者は全く一点の同情の余地もない人物とは描いていないと思う。この点が、

孫刑事は、彼の背後に収入だけではやっていけない貧しい家庭があり、同僚がいるとわざわざ述べているところに見て取れる。実際にこの記述は祥子から金を奪うこととは直接関係ない。にもかかわらず、このようなことを敢えて書いたのは、この表現によって、その当時の、その社会の「車引き」に対する考え方、受け取り方というものからすれば、孫刑事の祥子に対する態度は、いくらか誇張されてはいるが、むしろ一般的であり、特に孫刑事だけが悪いと言えないというふうに作者は読者に捉えさせたいのであろうと思われる。つまり、孫刑事が祥子の金を奪う行為は、孫刑事という特定の人物の問題に帰すのではなく、むしろ社会に一般に流布している「車引き」に対する考え方によって、孫刑事がこの行為をおこなったと作者はしたいのではないか。

祥子の住んでいる社会では「車引き」は牛馬程度としか考えられてないのであり、この考えが、ある特権を持った孫刑事を動かし、祥子から汗と涙で貯めた金を奪って行った、としたほうが作者の意図に近いだろう。

② 祥子の性格との関係

お金を奪われたショックは並大抵のものでない。祥子は刑事に自分の部屋を追い出され、雪の降る町へ出ていく。あれやこれや考えるうちに、曹先生に言いつけられたことを思い出し、曹家に引き返す。

曹家には奥さんや子供はすでに脱出していなく、召使いの高媽だけが残っていた。高媽は祥子が見知らぬ男と家に入って来、しばらくして姿が見えなくなり、結局、なにひとつ手伝いをせず、曹先生の言いつけを果たさなかったことをなじる。それに対し、祥子はほとんど言い訳のようなものはせず、高媽に後を追わせる。その際に、曹先生へ言伝をする場面が以下である。このやりとりに注目したい。

「先生に会ったら、おまえ言ってくれ、探偵がわし

を捕まえた。それでも、……それでも、……逮捕しなかったって。」

「なに言ってるんだい？」高媽は腹が立って、かえって笑ってしまいそうになった。

「ちゃんと聞いてくれ！」祥子はむしろ怒りだした。「先生に急いで逃げるように言ってくれ。探偵が、先生を必ず捕まえるって言った。左宅も安全な場所じゃない。急いで逃げてなさいって！おまえが行ったら、わしは王家に逃げ込み、一晚過す。この家の表門はしっかり鍵をしておく。明日は、自分の仕事を探しに行く。曹先生に申し訳ない！」

「言えは言うほど私には訳が分からなくなっていくよ。」高媽は溜め息をついた。「まあ、いいわ、私行くわ、おぼっちゃんも寒がっているかしのから、早く行って見なくちゃ！先生に会ったら祥子が先生に早く逃げるように言っていたって伝えるわ。今日の夜は、表門に鍵を掛けて、王家に行って寝、明日は仕事をさがす。これで良いんでしょう？」

祥子は非常に恥ずかしそうに頷いた。^(#16)

高媽の言葉に祥子はなぜ「非常に恥ずかしそうに」したのか、なぜ祥子の言ったとおりではないのに「頷いた」のか。

この場面でのやりとりから、祥子が能弁ではないというだけでなく、自分が孫刑事にお金を取られ、その事件によるショックで曹先生の言いつけを実行できなかったことをひどく気にし、余りにも曹先生に申し訳ながっているし、恥じ入っている、ことが窺える。そして、この気持ち余りにも強いが故に、自分がどのような悲惨な目にあつたのかについては、なにも伝えてない。むしろ伝えるのさえ申し訳ないと思っている。だから自分が頼まれた責務を果たさなかったことを言い訳ふうに言おうとしたことで「非常に恥ずかしそうに」し、孫刑事の件は入っていないが「頷いた」と解釈できるのではない。少なくとも、この展開に、祥子の「真面目さ」「おとなしさ」を読みとることは不可能でない。だが、そうであったが故に、高媽は祥子がどのよ

うな目にあったのか知ることはなく、曹先生にも事実が伝わる可能性は全くなってしまった。こうして、この事件はもともと曹先生に関わる事件であったのだが、祥子はそこにいたという理由だけで事件に巻きこまれ、彼が今まで積み上げてきた努力が一瞬のうちに水泡に帰してしまった。

また、この事件に絡んでも、祥子の「正直さ」を示す部分がある。それは以下の形でなされている。

祥子は、この事件でせつかく貯めてきたお金を全て取られてしまうことになり、そのお金を取り戻す一つの手段として、ふっと曹先生の家のものを盗み出すという考えが頭をかすめる。曹先生の家には誰もいない。やろうと思えば曹先生の家のものを盗むことができる。そうすれば自分の取られたお金のいくらかは取り戻すことができる。しかし、祥子はそのようなことはしない。しないばかりか、そのような考えをしたこと自体が恐ろしくなり、自分が疑われるような気持ちになり、一時避難した隣の家の車夫、老程を起こして、以下のようなことを言う。

「起きて、ちょっと電気をつけてくれ！」

「泥棒でもいるのか？」老程はぼんやりして坐った。

「はっきり目が覚めたかい？」

「ああ！」

「老程、見てくれ！これはわしの布団だ。これはわしの服だ。これは曹先生がわしにくれた五円だ。他には何にもないだろう？」

「ないよ。どうしたんだ？」

「はっきり目が覚めたかい？わしのものはこれだ。わしは曹家の草木一本だって取ってないだろう？」

「取ってない！俺たちは、長いことご主人のところで世話になっている。猫ばばして良いわけがない。やって良いことはやる。やっていけないことはやらない。人様のものを取ってはだめだ！まさしくこのことだろう？」

「わかってくれたかい？」

老程は笑った。「たしかに！ところで、寒くないかい？」

「大丈夫！」^(註17)

苦勞し、身を削るようにして貯めた金であり、もし可能性があるのであればどのようにしても、いくらかでも取り戻したい。この気持ちはよく分かる。だが、悪いことはしてはいけないし、考えることだけでも恐ろしい、祥子はそのような人物なのである。

では、この事件に対してどのような処置が最もよいのか。これに関しては、祥子は金を取られた経緯を老程に話し、それに対してどのようなやり方が最もよいかというふうに老程が答えるという形式で示されている。これが以下の文章である。

「おれの見るところでは、やっぱり曹先生のところに行ってきた方がいい。事件もこんなままにして置いてはいけないし、お金もこんなふうに取りられたままにしておいてはいけない！おまえはさっき言ったろう、先生がおまえに言った、様子が変だと思ったらすぐ逃げろって。だが、車から降りたらすぐ刑事に拘束されたんだ。あんたが悪い訳じゃない。あんたが不真面目だったんじゃない。この成り行きがおかしすぎた。自分の命を心配するしかなかったんだ！おれが見るに、これは何人様に申し訳ないというところはない。行ってきな、曹先生のところへ。始めから終わりまで、全部、話をするんだ。思うが、彼はぜったにおまえのせいなんかにはしない。うまくいけばおまえの金を弁償してくれるかもしれないぜ！早く行きな、布団はここに置いとけ。早く彼のところに行くんだ。」^(註18)

この老程の助言は正しい。もともと、この事件は曹先生が、ある学生の密告により、官憲の注意するところとなり、曹先生が刑事につけられたのである。祥子はたまたま其処にいただけである。しかも先生が祥子に家族を連れてくる

ようになどの用事を言いつけことも、被害に遭うこと繋がっている。もし、この事件の顛末を話せば、曹先生は良い人物だから分かってくれ、弁償してくれるかもしれない。

むしろ最初から祥子はこのようにすべきであった。しかし、遅かった。曹先生が逃げ込んだ先の左家の召使いが朝やって来て、曹先生たちは朝の七時四〇分の汽車ですでに上海に出発してしまったことを告げたからである。この結果、祥子はまた新たな不幸へと落ち込んでいくことになる。

この事件の展開では、祥子が「正直」で「真面目」で「大人し」かったことにより祥子だけが馬鹿を見たということになっている。もし彼が「正直」「真面目」でなく「大人しく」なく、もっと図々しければ、孫刑事にお金を奪われることもなかっただろうし、たとえ奪われたとしても、その被害を最小限に止めるられたかもしれない。人間の美德とされている性格が、かえってその人物を不幸にしてしまう。皮肉な構図である。

II 《車屋から追い出される》

次にもうひとつ、祥子が車屋の主人である劉四爺に車宿から追い出される場面を見ていく。この場面も、祥子が不幸に陥る重要な転換点となる。

祥子は車屋の主人、劉四爺の娘である虎娘に誘惑され、肉体関係を持つ。祥子は虎娘が好きではないが、子供ができたという彼女の発言に観念し、彼女と結婚しなければならないはめになる。もちろん、この結婚の承諾を劉四爺に得なければならない。虎娘は父親の誕生日の時、機嫌の良いときにこのことを切り出そうと考えた。うまくいけば、虎娘は車屋の主人の娘であるから、祥子は車屋の跡継ぎになれるのである。しかし、この計画は見事に失敗する。その結果、祥子と虎娘は車屋を出ていかなければならないことになる。

なぜこのようになったのか。このことを作品の展開の中で考えてみる。

① 「車引き」に対する差別

もともと劉四爺は祥子のことが嫌いではなかった。祥子に対する扱いは他の車引き以上のものであった。身よりのない祥子も劉四爺を親戚のように思ったこともあった。にもかかわらず、劉四爺が自分の娘を祥子に嫁としてやらなかったのには、幾つかの理由がある。

劉四爺の目は節穴ではなかった。前後聞いたこと見たこと全てを一カ所に置いてみると、彼は心の中で八九割がたはっきり分かっていた。この数日、娘が特に聞き分けがよいのは、ふん、祥子が帰ってきたからだ。彼女の目はいつも彼を追っかけている。老人はこのことを心に掛けると、さらに寂しく味気なく悲しかった。ちょっと考えて見な、もともと男の子供がいないんだから、繁盛した家庭なんか作れなのさ。娘は出て行っちゃう。自分の一生の苦心は無駄だった。祥子は確かに悪くない。しかし婿養子とするには、やはり相応ではない。たかが車引きだ！自分が一生荒波にもまれ、喧嘩をし、鉄の規則にひざを折りしてきたものが、死ぬ前になって田舎者に娘から商売までみんなもって行かれるのか？ そんなかつてなことさせるか！ 劉四爺はな、子供の頃から転んでもただでは起きない人間なんだ！（註19）

ここでも、劉四爺が祥子を不幸にする関係は以下のように表すことができる。

（不合理な仕打ち）

社会通念⇒劉四爺——→祥子⇒不幸になる

劉四爺を単純に「悪い」人物とすることはできない。劉四爺と祥子はもとは親子のような信頼関係にあった。だから祥子も儲けたお金を劉四爺に預けるということまでした。劉四爺の方も祥子が真面目で、正直な人物であることは十分わかっているし、車屋を乗っ取るために虎娘

と結婚するのではないということをも知っている。にもかかわらず、劉四爺が結婚を認めなかったのには、いくつか理由がある。そもそも二人でいつも間にか肉体関係を結び、しかも子供ができてしまい、そこで結婚を認めてもらおうというのは非常識すぎる。また、劉四爺の、一人しかいない子供である娘を嫁にやることのつらさ、自分がこれまで一生懸命築いてきたものを人にくれてやらなければならない無念さもよくわかる。

だが、この作品で劉四爺が彼らの結婚を認めない理由の最も大きなものは、当時の社会の通念になっていたであろう「車引き」に対する考え方ではないか。劉四爺は「車引き」を使って商売し、彼らと付き合っているにもかかわらず、やはり根っこは普通の人々と同じなのである。確かに娘と祥子の非常識な行い、劉四爺の娘を嫁にやるつらさ、無念さはわかる。だが、それらは祥子が田舎出身の「車引き」であるということによって増強されているように見える。すべての理由の根底に祥子が「車引き」だからという理由がまずあると考えると良いと思われる。

② 祥子の性格との関係

この際、祥子と虎娘が不幸にならないための方法はなかったのか。あるにはある。劉四爺が結婚に反対しても、虎娘の方は祥子との結婚を望んでいるのだから、もし祥子ももっとずるがしこく立ち回ることができたなら、もし悪い考えを持ってことに対処したならば、或いは祥子が以後に陥るような悲惨な状況は免れたかもしれない。ところが祥子にはそのようなことができないばかりか、「車屋」の跡継ぎになろうと思う気持さえ最初からなかった。^(#20)

劉四爺がどうしても虎娘の結婚に同意せず、最終的には喧嘩をし、家を出ていくという形になるのだが、この際にも祥子は以下のような対応の仕方をするのみである。

腕ずくということになれば、祥子は老人を殴る

ことはできないし、女性を殴ることもできない。彼の力是用いるところがなかった。ふてぶてしい態度を取ることはできる。だがこれは考えただけで、することはできなかった。虎娘、この人物については、彼は逃げ出すことはできる。しかし、目の前のこの場面を見ると、彼女は父親と仲違いをしてまで彼と一緒に出て行こうとしている。心の中のことは分からない、だが表面上からすれば彼女は祥子のために犠牲になっているのだ。だとすればみんなの前で英雄の気概を持ち出さなければならない。彼は何も言わなかった。ただそこに立ち、ことの決着が付くのを待つことだけができるだけだった。少なくとも彼はこうしなければならぬし、こうしてはじめて男の中の男らしくなることができるのだ。^(#21)

既に述べたように、もし祥子が「ずるがしこい」人物であれば、虎娘と一緒にになり、劉四爺を騙したり、ひどい目に遭わせることができたかもしれない。祥子はこのような人物ではなかった。寧ろこのような考えをしない人物なのである。もともと虎娘との一件は、祥子はどうしようとも考えてなかった。だから、この場面では、祥子は何も言わなかったし、何もしなかった。ただ虎娘の言うとおりにしただけである。このようなことだって決して容易なことではない。このような態度を取ったのは、やはり祥子が「正直」で、「真面目」で、「大人しかった」し、さらには「やさしかった」からであろう。その結果、祥子も虎娘と一緒に「車屋」を出ていくことになった。虎娘は自分の父親に対して、血のつながりがあるという点から、まだ父親との関係回復に楽観的だったが、劉四爺はこの事件の後すぐ「車屋」を人に売って、旅に出て行ってしまった。そうして、その後、虎娘は難産で死んでしまい、生きて父親に二度と会うことはなかった。この結末は父親の劉四爺にとっても不幸なものである。

III 《ま と め》

孫刑事、劉四爺が祥子を不幸に陥れる、二つの場面を観察した。この際、主に祥子が「車引き」であることで受ける迫害と、祥子の性格との関係に注目した。このふたつは「車引き」であるというだけの理由で不合理な扱いを受け、その不合理な扱いを受ける側の人物が「真面目で」「正直で」「大人しい」などの好ましい性格であるが故に、不合理な扱いをそのまま受け入れてしまうことになってしまうという形で結びついていることがわかった。

特に後者の性格は誉められても良いはずのものが、祥子が「真面目で」「正直で」「大人しい」さを発揮するに当たり、かえって「のろま」とか「うすのろ」とさえ思えてきてしまう。これは祥子がみすみす不幸に陥っていくことに対する苛立ちから起こるもので、すでに祥子が自分の身内のような気になってしいるからではないだろうか。祥子を思うあまり、祥子の持つ、普通には好ましいと考えられている性格を否定しているのである。

また、この場合、作者が加害者である孫刑事、劉四爺の境遇を故意に同情的な表現で説明していることを考えれば、祥子を不幸に突き落とすような行為を、彼ら個人のレベルの問題で終わらせない作者の意図が伺える。彼らの残酷な行為の根底にある「車引き」に対する考え方は彼ら個人のものではなく、むしろ一般的に行われているものと捉えさせようとしているのである。

では作者は『駱駝祥子』をこのような作品に作りあげることによって何を主張しようとしているのか。

分析結果からすると、「車引き」が人間以下の人々であるという考え方が普通である社会にあっては、もし「車引き」が「真面目で」「正直で」「大人しい」性格であれば、その人物はこの社会では生きていくことはできないということになる。

だとすれば、このような社会では、「車引き」は「真面目で」「正直で」「大人しい」であれば不幸になるのであるから、必ずしも「真面目で」「正直で」「大人しい」である必要はないという主張と受け取ることができる^(註22)。実際に祥子は作品の後半では「真面目で」「正直で」「大人しく」ない行為をする場面がでてくる。しかし、祥子がたとえ「真面目で」「正直で」「大人しく」ない行為をしても、祥子の、その行為を許すような、或いは認めてしまうような気持ちさせられるのである。このことは同時に、この作品を読むことで、現実の世界においても、祥子のような「車引き」に対する見方が変わる可能性を持っていることになる。もちろん、これは作者が読者がそうなるように意図し作品を作っているからである。

また、次のようなことも言えるのではないか。作品ですで見えてきたように、「車引き」を仕事とする人物で、「真面目で」「正直で」「大人しく」がもっとも馬鹿を見る姿が描き出されていた。ここには、いつも、どのような社会にも存在している、ある種の矛盾のようなものがあるような気がする。作者はこの作品でこのようなものにも言及しているような気がする。

そもそも人間というものは、極めて不安定でもろい基盤の上で生きているという悲しい事実を持つ。我々人間は生きていくために努力をしており、勤勉に働いている。その結果、どうにかこうにか平穩無事に生活が送れているのである。しかしながらまた、いつも、どのようなはずみにか（例えば病氣、自然災害、戦争等）この平穩無事の生活が壊れる可能性をもある。この「危うさ」は日頃意識されることはないが、何かの拍子に自分が「危うさ」の上に立っていることをいやが上にも気づかされることがある。この作品はこの宿命を改めて思い起こさせるものである。

しかし、この人間の「危うさ」は全ての人に平等ではない。作品にあるように、もし社会が悲惨であるなら、悲劇はこの同じ社会の中でも、

社会の最下層の人々、社会の中でも弱い人々の暮らしの中に最も顕著に現れる。しかもそのような人々の中でも、とりわけ大きい被害を受けるのは、「正直」「真面目」「おとなしい」人々ではないか。車引きの祥子は身体はでかいが、まさしく「正直」「真面目」「大人しい」性格の人物であった。その彼が汗水垂らし、黙々と車を引き、精一杯努力したにもかかわらず、最後に、肉体的にも、精神的にもぼろぼろになってしまう。祥子がこうであるから、他の「正直」「真面目」「おとなしい」車夫、或いはもっと弱い人々はいわずもがなである。そして、もしこのようであるなら、祥子のような人々が「正直」「真面目」「おとなしい」を放棄しても誰も批判できないことになる。

このような普遍的な点を持つことも中国のみならず世界の人々に長い間読まれ続けている理由があるのではないか。

おわりに

今回、結局、この小論で述べたのは老舎の『駱駝祥子』での成果のほんの一部分に明らかにしたに過ぎない。作品を分析する方向はいろいろあろうし、まだ考えなければならぬことはたくさんある。例えば、この『駱駝祥子』の悲劇の形を、先行作品である中編小説『月牙兒』に求めることもできるかもしれない。^(注23) このことも考えなければならぬだろう。また、この作品は中華人民共和国内で、作者自身の手によって手に入れられた^(注24)。この削除で作品はどのように変わったのか。今回は、この点にも触れてない。ただ、今回の考察で、この時期の老舎がやろうとしていた方向、考え方のいつかは明らかになっているのではないかと思う。さらに続けて考えてみたい。(完)

(注)

この作品のテキストとしては『老舎文集』に収録

されているものを使った。この作品の翻訳は多数出しており、ここではいちいち挙げないが、適宜参照させてもらった。なおこの翻訳状況に関しては(注6)の日下氏の論文に詳しく書かれている。また、翻訳ではないが、1995年10月に出版された。『老舎 駱駝祥子 注釈』(牛島徳次著・同学社)は素晴らしい注釈で、大いに参考になった。

(1) 単行本としての出版状況は以下のようになっている。

上海 人間書屋 1939年3月初版 1947年6月再版 1940年2月3版 1941年4月6版

上海 文化生活出版社 1941年11月初版1948年3月5版 1948年6月5版 1949年2月8版

上海 晨光 1950年5月初版 1951年7月3版 1952年1月4版 1953年4月5版 1953年5月6版 1953年5月7版

北京 人民文学出版社1955年1月1版 1962年10月再版 1978年8月重印

<冒名、盗版書目>

瀋陽啓智書店 1941年3月

大連閩東出版社 1944年

以上『首都図書館編 老舎研究資料編目 北京市図書館学会』(采華書林)に依る。

また『老舎文集』(人民文学出版社・第一巻1980年11月～第十四巻1989年2月)『老舎小説全集』(長江文芸出版社・1993年11月)『老舎小説経典』(九州図書出版社・1995年6月)も出版されており、この中にも収められている。

なお単行本で人民文学出版社から出ているもののうち、1955年、1962年、1978年の版は作者による最後の部分の削除がある。だが、1985年10月に中国現代長篇小説叢書の一つとして、同じ人民文学出版社から出された『老舎 駱駝祥子』は、削除される前の作品に戻っている。

(2) この評価については、ほとんど定説になっていると思われる。例えば、『駱駝祥子』は、老舎全小説の中で最も著名な作品であり、三十年代の代表作と称されるばかりでなく、現代中国文学中の傑作の一つに数えられている。しかも世界各国の言葉に翻訳されて、広く外国にも愛読者を有する作品である。』(『老舎小説全集5』解説・日下恒夫)がある。

(3) 筆者はこれまで老舎の幾つかの小説を考えてきた。その成果は、以下の論文に書いた。この論文に関係あるものだけを記しておく。

○「『老張的哲学』私論」(集刊東洋学)57号pp.101-119)

○「『趙子曰』試論」(「八戸工業大学紀要」9巻・pp.187-197)

○「『二馬』試論」(「八戸工業大学紀要」第10巻・pp.205-214)

(4) 同上

- (5) 例えば「这些初期作品，以浓厚的地方特色和活泼、幽默、晓畅的语言风格，开始显露了一些弱点，这就是作品的时代特征不够明显，虽有揭露和讽刺而缺少力度，艺术结构尚嫌松散和因过分追求幽默，趣味而有失主题的严肃性。」（『簡明中国現代文学史』伯周主編・天津人民出版社・1986年P273）である。
- この文章で見られるように、老舎の作品に「ユーモア」がある、だが、「ユーモア」というのはというのとは決して名譽なものではなく、かえって欠点と見られていた。筆者は老舎の「ユーモア」、「笑い」があることをもっと積極的な意味のあるものとして考えてみた。
- (6) 『駱駝祥子』の命名に関して、日下恒夫氏は次のように述べている。「ラクダというのは主人公のあだ名です。引っ張られて行った兵隊のところから逃げるときに駱駝を連れて帰ったので、そんな名前が付けられたというのが小説の中で語られる理由です。祥子も人間を運ぶという意味では共通点があるのですが、それだけで駱駝の祥子にしたわけではありません。車と駱駝といえ、北京の俗語『駱駝が車に乗る』そのところは『最後の楽しみ』というのがあります。つまり死んだときです。だから『最後の楽しみ』なのです。車引き祥子の一生はまさに駱駝の一生だったので、実によく考えられたタイトルの命名方だと思います。／また祥子という名は『～子』という呼び名を見ただけで、下層の男性の名前であることが知られます。」（『泊園』第三十二号p49）
- (7) 『駱駝祥子』「一」p 9
- (8) 「(略)……不仅引起读者对他的命运的关心而且促使读者思考他们的出路问题。所以这部小说不只是三十年代，即使现在也有一定的认识教育作用。」（『试谈《駱駝祥子》现实主义悲剧艺术的成就』朴龍山・延辺大学学報（社科）1983年4期）という指摘からわかるように、作品がこのようにさせるのであろう。
- (9) 『中国現代文学史』（北京大学 南京大学 厦門大学 安徽師範大学 南京師範大学 揚州師範学院 徐州師範学院 延辺大学 安徽大学《中国現代文学史》編写組編写・江蘇人民出版社・1979年8月第1版、1984年第2次印刷）p296
- (10) 同上p297
- (11) このような指摘はいくつかある。文学史では、例えば「作为一个个体力劳动者，祥子有他自身的弱点，狭隘的眼光和社会生活的无知，使他迷信车能把他带到理想境界，为此，他付出了灵魂毁灭的代价。」（『簡明中国現代文学史』邵伯周主編・天津出版社・1986年6月第1版、1886年6月第1次印刷）がある。
- (12) 祥子の性格がよいことでもどの論者でも認めることである。「作者生动的描写了祥子的劳动人民所具有的美感」（『试谈《駱駝祥子》现实主义悲剧艺术的成就』朴龍山・延辺大学学報（社科）1983年4期）または「他既具有农民的坚韧、淳朴、勤劳、善良、对改变生活现状满怀希望的本质特征，又带有小生产者的根深蒂固的私有观念以及由此而来的个人奋斗的利己主义的特点。」（『试谈《駱駝祥子》人物形象的设置』陳奔・福建師範大学学报・1979年3期）のような見方もある。ただ、農民気質とか、労働者の性格という表現は、恐らく社会事情もあるだろうが、むしろ筆者の人間が備えている好ましい性格とするのとは、いささか相違はある。
- (13) 『駱駝祥子』「四」p37
- (14) 『駱駝祥子』「十一」p101
- (15) 同上
- (16) 『駱駝祥子』「十二」p105～106
- (17) 『駱駝祥子』「十二」p111～112
- (18) 『駱駝祥子』「十三」p114～115
- (19) 『駱駝祥子』「十四」p126～127
- (20) このような野心を持ってないことも、祥子を好ましい性格の人物と感じさせる部分のひとつになっている。
- (21) 『駱駝祥子』「十五」p132
- (22) 老舎は「我怎么写《老张的哲学》」（《老牛破车》）題する創作体験談の中で「貧乏人の狡猾も正義である」と述べている。もともと『老張的哲学』について述べた文章だが、この『駱駝祥子』はまさしく、その老舎の発言に驚くほど、その考え方にぴったりあっている。このような指摘はすでにある。例えば「这部小说（《駱駝祥子》），正好包含着“穷人的狡猾也是正义”的思想，而且和过去的作品相比较，的确不再是“一半恨一半笑的去看世界”了，而且怀着最大的愤懑抨击旧世界。」（『论《駱駝祥子》的现实主义——纪念老舎先生八十诞辰』樊駿・文学评论・1979年1期）のようなものもある。ここで引用されているのは「我怎么写《老张的哲学》」の文章である。なお前半のカンマの前の文に注が添えられ以下のように書かれている。「不仅整个故事表现出这个意思，小说中有的话直接表达了类似的意思，“苦人的懒是努力而落了空的自然结果，苦人的要刺儿含着一些公理”と。私の作品理解と同じである。ただし、このような老舎の「我怎么写《老张的哲学》」の意味は、本論文のような分析ではさらに理解しやすいのではないか。
- (23) 中編小説『月牙兒』が悲劇であるという点、また作品の展開の仕方から考えるに、この『駱駝祥子』と同じ視点で作品を分析すれば興味のある結果がでるのではないかと思う。今後の課題にしたい。
- (24) その改作の主要な部分は、作品も後半部の削除である。原作は全部で「二十四」回であったが、「二十三」の半分ほどと「二十四」が削除された。